【高等学校用】

令和２年度学校評価 結果・学校関係者評価

学校名	佐賀県立鹿島高等学校

達成度（評価）
A：十分達成できている
B：おおむね達成できている
C：やや不十分である
D：不十分である

1　前年度 評価結果の概要	**鹿島(新鹿島を含む)：進路実現や授業改善に向けた取組は高い評価を得ているが、さらなる改善によって、理解度を高め、より深い思考を可能にする指導が課題である。** **鹿実(新鹿島を含む)：合格内定１００％であった。社会問題への視点の獲得、地域の活性化に貢献できる教育活動の展開、働き方改革の推進が課題である。**
2　学校教育目標	**高い志をもち、主体的に道を切り開いていく心豊かで逞しい人を育成する。**
3　本年度の重点目標	**①　豊かな人間性や高い志を育む教育の推進** **②　「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業の工夫・改善** **③　「地域とつながる高校魅力づくりプロジェクト」の推進** **④　教職員の働き方改革の推進** **⑤　校舎制による円滑な学校運営の推進**

4　重点取組内容・成果指標　　**5　最終評価**

（1）共通評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
●学力の向上	○「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業の工夫・改善	○意欲的に学ぶことができたと答える生徒80％以上 ○コミュニケーション能力が向上したと答える生徒80％以上 ○専門性あるいは学力が向上したと答える生徒80％以上	・授業を公開し、授業研究会を実施する。（各教科2名以上） ・教員の校外研修への参加を推奨する。 ・各教科の年間指導計画の完遂を目指す。	A	・公開授業の実施は各教科100%実施できた。 ・県内研修、県外研修ともにリモート開催が多くなったが、いずれも計画的に参加できた。 ・各教科とも、「対話的・主体的で深い学び」への移行を一層進めていく必要があり、次年度の指導計画に生かしていく。	A	・1年生は高校での学習の仕方がわからないまま休校になったのかもしれないが、2・3年生にとっては、休校が「自分で取り組む」力を身に付ける機会となり、オンライン学習が功を奏したと考えられる。 ・多様な生徒がいる中で、「深い」学びについて指標を共有するとよいのではないか。知識の概念化や一定レベルの技術獲得など、これまでの蓄積を生かして整理してみてはどうか。
	○◎キャリア教育の推進に基づく希望進路実現への支援	○将来の目標に向かって挑戦していると答える生徒80％以上 ○志望校合格90％以上 ○就職内定率100％	・3年間を見通した指導計画の実践 （家庭学習時間調査・外部講師による各種ガイダンス・進路検討会・面談等） ・学びと経験の記録を蓄積させ、自己のあり方を考えさせる。	A	・各学年の進路連絡会や、就職ガイダンスは予定通り実施することができた。 ・商業科と食品調理科においては、進学・就職ともに100%の内定率であった。 ・将来の目標に向かって挑戦していると答えた生徒の割合が全体で76%であり、学年が上がるごとに割合が高くなっているので、一年生の時から進路意識を高める必要がある。	B	・「挑戦」している」生徒の割合が学年が上がるごとに高くなっており、生徒の変容が窺える点を高く評価する。ただし、数値目標が80%であったのに対し、結果は76%でありわずかに目標に届いていない。コロナの影響等があったかもしれないが、この数値を厳しくとらえ直すことがさらに鹿島の底力を開花させると考え、あえてBとした。
●心の教育	●生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○学習や体験をとおして、ものの見方や考え方が広がったと答える生徒90％以上 ○自己有用感、自己肯定感が高まったと答える生徒70％以上	・授業、学校行事、部活動等をとおして柔軟で幅広いものの見方や考え方を育む。 ・道徳教育の全体計画を策定し、様々な場面でその趣旨に即した指導を展開する。 ・人権・同和教育に関するホームルーム活動や講演会を行う。 ・地域におけるボランティアへの参加を推奨する。	A	・アンケートで、学習や体験をとおしてものの見方や考え方が広がったと思う生徒は90%であった。 ・道徳や人権・同和教育は、計画の変更はあったものの柔軟に対応し、ホームルーム活動や講演会などを学年ごとに実施できた。 ・アンケートで、自己有用感、自己肯定感が高まったと答える生徒は76%と目標達成できた。今後はさらに、生徒一人一人の変容を見抜き、的確な指導を行っていきたい。	A	・自己有用感や自己肯定感が高まった生徒が76%であり、数値目標を超えている。きわめて高い数値であり素晴らしい。ここで大切なことは他の24%の生徒への対応である。中間の個人面談などをとおして個々の生徒を支えサポートする丁寧な対応を組織として行っていく必要がある。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○いじめ防止の方針にしたがって、組織的対応ができていると回答する教員90％以上 ○いじめは許されないという考えに基づき行動できたと答える生徒90％以上	・年10回程度のアンケート調査を行う。 ・気になる生徒への声かけを行うとともに、学年会などで情報共有を行う。 ・いじめ体罰等対策委員会により、組織としての対応を迅速に行う。	A	・アンケート調査を10回実施。また、週に1回程度の学年会で気になる生徒について情報交換を行った。 ・いじめを覚知した場合は、校内のいじめ対策委員会により対応した。些細なトラブルの段階を含めて、数多くの案件に対応できた。	A	・数多くの案件とあるが、いわゆる社会通念上のいじめのみならず、いじめ防止対策推進法の規定にそって、幅広く対応されている。些細な言葉の行き違いがあったがすぐに誤解が解けたものなど軽微な事案が多いが、今年のように背後に深刻な事態が潜んでいないか一件一件検証していくことが基本である。また、部活動内の様子には常に注意が必要である。
●健康・体つくり	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	○健康に食事は大切であると考える生徒90％以上 ○朝食の喫食率90％以上	・家庭・保健の授業及び保健だより等を活用し、正しい情報を提供する。 ・食習慣に関するアンケートを実施し、結果をもとに必要な指導を実施する。	A	・家庭や保健の授業及び保健だよりで、適切な食事について情報提供、指導を行った。 ・アンケートで「健康に食事は大切である」と考える保護者は99%、朝食の喫食率は96%とどちらも目標達成ができたのは良かった。	A	・家庭の意識が高く、可能な場合は極力弁当を持参している様子が窺える。学校としても引き続き現行の取組を継続していただきたい。
	●「安全に関する資質・能力の育成」	○生徒の交通事故を0（ゼロ）にする	・講演会や集会等をとおして、危険を回避する具体的方法を身に付けさせる。 ・登下校時等の校外指導を行う。	A	・交通マナーに関する注意喚起、登校時の交通指導や下校時の巡視を随時実施できた。 ・交通安全教室を開催し、交通事故に至る状況とその予防について指導を行った。	A	・目標値0件に対し、3件の交通事故が発生している。今後、学校の防止策を継続する必要はあるが、都市建設課など行政が行う道路整備やまちづくり政策へ参画し、生徒・職員の意見をもとにインフラの整備へつなげていくことが大切である。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・定時退勤日、学校閉庁日、部活動休養日の設定を行う。 ・衛生委員会等において意見を集約する。 ・各主任を中心に業務削減を行う。 ・個々の職員による効率化のための目標設定を行う。	A	・定時退勤日、学校閉庁日、部活動休養日の設定を継続し、衛生委員会については、規定どおり実施した。 ・月100時間・複数月均80時間の職員は激減し、在校等時間の上限も、対象職員平均値(月基準45h以下)は守られている。	A	・特にご意見はなかった。

（2）本年度重点的に取り組む独自評価項目

重点取組			具体的取組	最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 （数値目標）		達成度 （評価）	実施結果	評価	意見や提言
○魅力と活力ある学校づくり	○地域とつながる魅力ある学校づくりプロジェクトの推進	○主体的に探究活動に取り組んだと答える生徒を90％にする。 ○物事を分析する力を身に付けたと答える生徒を70％以上にする。	・7分野について講師より課題を提示し、解決策を考えさせる。 ・成果発表会を設定し、プレゼンテーションに取り組ませる。 ・外部評価を聴く機会を設定する。	A	課題を明確にし、目的意識を持たせることで、主体的に探究活動に取り組んだと答える生徒が89%であった。全員が発表の機会を持つことができたことも、成果につながったと思われる。また、見識ある外部講師の助言等により物事を分析する力を身に付けることができたと答えた生徒が87%であった。	A	・外部との連携により、生徒が柔軟な発想で新たな提案を行っていることは素晴らしい。様々な提案のうち、数は少なくてもいくつかは地域社会において実現できれば、さらに周囲の生徒や後輩などの励みになっていくのではないか。せっかくの発想を校内で納める考え方はあまり必要ないと思われる。
○校舎制による円滑な学校運営	○職員の相互乗り入れ授業と学校行事等における生徒交流	○職員間の連携及び学舎間の移動がスムーズに行えたと回答する職員80％以上 ○校舎を超えた活動に意義を感じたと答える生徒70％以上	・各種会議を合同で行う。 ・校時や行事等については、職員、生徒の移動に配慮し、無理のない計画を立てる。 ・内線電話、学舎間逓送、メール会議、オンライン会議等を活用した情報交換や協議等を心がける。 ・学校行事や部活動を合同で実施する。	A	・学年会議や分掌会議などを両学舎合同で行い、学舎別の業務を一本化するなどして、効率化を図った。 ・学校行事など校舎を超えた活動に意儀を感じた生徒の割合が87%であり、生徒の中に、一つの学校という意識が根付いてきたと思われる。背景には、新しい鹿島高校を創るという矜持もある。	A	・新たな鹿島高校を考えるとき、特に普通科においては、他の進学校にはない魅力づくりが必要である。進学だけではない幅の広い教育活動を行いつつ、中学生の動向を踏まえた戦略を展開していくことが求められる。

●･･･県共通　○･･･学校独自　◎･･･志を高める教育

5　総合評価・ 次年度への展望	・学舎制による学校づくりが進んで、多様な生徒・職員が交流を図ることができるようになり、新たな学校としての創造性が高まっている。それを具現化し、唯一無二の学校づくりにつなげたい。 ・学校運営協議会制度の試行により、地域連携のシステムを維持しながら、深まりのある学びの全体像を構築していく。 ・不登校傾向の生徒への対応、いじめ対応、事件事故の未然防止等に一層力を入れ、安心で安全な学校づくりを推進する。 ・男女兼用の制服や新たな校則の設定等により、時代に応じた学習環境を整える。